

日本における「トリスタンとイズー」伝承群（一）

髪長姫、絵姿女房、イズー、そして玉鬘

梅 山 秀 幸

「つきせず隔てたまへるつらさに、あらはさじと思ひつるものを。いまだに名のりし給へ。いとむくつけし」との給へど、「海人の子なれば」とてさすがにうちとけぬありさま、さすがにあひだれたり。

（『源氏物語』夕顔）

紀伊国日高郡の道成寺といえば、いうまでもなく、安珍・清姫の物語で有名な古刹である。真砂の庄司の女の旅の若い僧への邪恋はつとに『法華験記』にとられ、色鮮やかな絵巻物『道成寺縁起絵巻』も存在し、古作の能の『道成寺』があり、また歌舞伎では種々の趣向をこらして『娘道成寺』が繰り返し演じられる。おそらく歌舞伎の中でも、『勸進帳』とともに最も頻繁に演じられ、目にすることの多い出し物ではないだろうか。

ところが、この道成寺にはもう一つ、まさしくこのお寺の草創の由来を説く物語が存在していて、「縁起」というには、むしろこちらの物語の方がふさわしい。それは、日高郡のこの里に住む海人の夫婦に女の子が生まれ、宮子と名付けられた。その女の子は観音さまの加護で長く美しい髪の毛の持ち主に育ったが、あるとき、鳥がその髪の毛をくわえて行き、都の宮殿の軒に巣を作ったのがきっかけで、藤原不比等に尋ね出され、その養女として文武天皇の後宮に入った。道成寺はその藤原宮子のために、文武天皇の勅願によって創建されたものだということである。梅原猛氏の『海人と天皇』は、藤原家

の後宮政策の端緒を作ったとされる宮子が実は日高の郡の海人の娘であったという、荒唐無稽とも思われる容易ならざる言い伝えを、そのままありえた事実として、奈良時代の歴史の真相を掘り起こそうと試みられている。

この論考ではこの「髪長姫」のものがたりを別の視点から取り上げる。

別の視点　すでに、この論の題として種明かしはしてしまっている。髪長姫の物語は「トリスタンとイズー」の一つのヴァリエーションなのではないか、あるいは死に至るほどの情念である恋愛の究極の神話である「トリスタンとイズー」も、実は髪長姫の一つの変異なのではないか。シンデレラのサイクル（伝承群）は世界中に存在していて、日本でも御伽草子の「鉢かつき」や「姥皮」、あるいは昔話の「灰坊」がそれにくわえられる。さらには『古事記』の中で「火焼」として灰まみれになって過ごし、後には見出されて皇位を継ぐオケ・ヲケの物語なども、シンデレラ（灰まみれ）の日本の変異であると考えられる。同じように、「トリスタンとイズー」のサイクルとして極東の日本の物語もいくつかの例を提供することができるのではないかとと思われる。

I、『道成寺絵とき本』

梅原猛氏の『海人と天皇』は、かつて『朝日ジャーナル』に「日本とは何か」というタイトルで連載されたものだが（1989年1月6日～1990年12月28日）後に題を改めて『海人と天皇 上・下』として単行本として出版され（朝日新聞社1991年12月）そして梅原氏としては第二期の著作集となるものの中にあらためて収録された（『海人と天皇 上・下 梅原猛著作集3・4』小学館2002年2月・4月）。筆者はその著作集に収められる際に解説を書くことを依頼され、その関係でいくつかの資料を手にするようになったのだが、それらを手掛かりに論を進めていくことにする。

まず道成寺の受付で売られていて容易に手にするのできる『道成寺絵とき本』（道成寺護持会発行）なる本がある。小野宏海述・藤原成憲画とあつ

て、「宮子姫髪長譚」・「安珍・清姫の話」・「娘道成寺後日譚」の三つのものが見え、住持の小野宏海師が口述されたものであるらしい。話芸に巧みな僧侶が絵を前にして、聴衆をひきつけるために臨機応変に変奏しながら、千数百年ものあいだ、語り継がれて来たものであったろう。その口承の場における面白さや魅力といったものをここでは再現することができないが、要約を次に示すことにする。見出しは『道成寺絵とき本』のものをそのまま利用させていただく。

（九海士の里のおこり）

神功皇后が三韓を攻めて帰国の際、紀伊国日高の水門で産気をもよおし、この地で無事に皇子（後の応神天皇）を出産した。産後の肥立ちもめでたく都に帰ることになり、九人の兵士を残してこの地に住まわせた。九人は海士を生業としたので、この地を「九海士の里」というようになった。九人の海士たちは神功皇后の行宮を清めてお祭りしたが、これが今は道成寺の隣にある八幡宮の起源である。

（渚の信心）

九海士の里に早鷹と渚という夫婦者がいたが、四十を超えても子を授からなかった。しかし、八幡宮への信仰を怠ることなく、子を授かるように祈り続けていたところ、ようやく渚は妊娠した。

（玉のような女の児）

白鳳八年（679）、渚は玉のような女の子を産んで、八幡宮の申し子だから宮子と名前を付けた。ところが、この子は頭がつるつるで髪の毛がまったくなかったから、両親はたいへん悲しんだ。

（髪に恨みの数々）

早鷹と渚の夫婦はこの子を掌中の珠のように大切に育てた。器量ならだれにも負けぬほどに美しかったが、それでも髪の毛はなかなか生えず、両親は日夜そのことを気に病んだ。

（稀れな不漁続き）

ある年、九海士の浦ではひどい時化が続いて、網を引き、釣り糸を垂れたところで一匹の雑魚もとれない深刻な不漁の日々が続いた。里の人々は困り果てたが、沖の方では海中から光がさしている。里の人々は海の底の光り物が怪しいと思い、その光り物の正体を見極める必要があると考え出す。しかし、海底に潜ってその光り物の正体を見極めようという者はいない。

（海底を探る海女）

渚は自分の娘に髪の毛が生えないのは何か前世の報いであろうと考え、その罪滅ぼしのために海に潜り、光り物を見極めようと決断した。

（頭髮に懸る黄金仏）

渚は命をかけて一心に海の底の光を目指して潜って行った。苦しくて息も絶えるかと思ったところで、そのまま気を失い、気がつくと、海岸に打ち上げられていた。渚の頭にはびかびかと光るものが付いていて、よく見ると、それは小さな黄金の仏像であった。

（庵に祀る黄金仏）

海の光り物はなくなって、九海士の里は大漁続きとなった。渚は自分の功を誇ることなく、柴の庵を結んで黄金の仏像を祀り、礼拝を怠らなかった。

（観音様の夢の告げ）

渚の夜の夢の中に黄金仏が現れ、みずからは補陀洛浄土の観世音であり、願いがあればかなえようと告げる。渚は七珍八宝もいないので、ただ娘の頭に髪を生やしてほしいと祈る。

（髪が生えました）

たちまちに奇瑞が現れて、娘の頭に髪が生える。

（七尺有余の黒髪）

娘の髪はますます伸びて、年頃になると背丈よりも長くなり、七尺にも余るほどになったので、人々は娘を「髪長姫」と呼んだ。この髪の毛は観音様からの賜り物だとして、一筋たりともおろそかにせず、抜けると大切に木の枝にかけた。すると、一羽の雀がどこからかやってきて、その髪の毛を加え

て飛び去っていった。

（宮廷の軒に髪の毛）

都の宮廷の軒端に雀が巣をかけ、そこから一筋の長い髪の毛が垂れ下がっている。衛士たちが恐れ多いことだとして、それを払いのけようとする。

（不比等大臣の参内）

折から、大臣の不比等が通りかかり、七尺に余る長く美しい髪の毛を見て驚く。

（麗髪の毛を求めて）

不比等は髪の毛の持ち主を宮仕えさせようと、ときの帝に奏上する。栗田の真人が勅命をこうむって、髪の毛の持ち主を探す旅に出かけた。

（黒髪の毛の魅力に曳かれて）

栗田の真人は九海士の里にたどりつき、髪の毛の持ち主にめぐり合うことができた。

（これぞ尋ねる髪の毛の主）

栗田の真人は勅命の趣を伝える。一村は喜びに沸きたち、早鷹と渚は一人娘を手放すのを悲しんだものの、もともと道理のわかる者たちであり、勅命に背くのも畏れ多く、娘を都に旅立たせる。

（宮子姫之命と名を賜う）

宮子は不比等の屋敷に迎えられ、衣装万端を改めると、天稟の美しさにはさらに磨きがかかった。不比等は自分の養女とし、宮子姫之命と名前を賜って、文武天皇のお側近くにお仕えすることになった。宮子は天皇の寵愛を受けて皇子を産んだが、それが後の聖武天皇である。

（雨の日は姫が泣く）

宮子は宮廷の中で生きて栄華を享受したが、故郷を忘れることはなく、中でも、雨の日には雨ざらしも同然の観世音のことが気に懸かって憂いに沈んだ。そのことが天皇のお耳にも達し、速やかに寺を建造すべしとの勅命が下った。

(道成卿が人柱となる)

紀道成卿が伽藍造営の奉行となって土地を相し、寺院の建設は進められた。ところが、材木を上流で調達して日高川を筏で下るとき、筏が転覆して道成卿は相果ててしまった。そこで、道成卿を祀る紀道明神が今も三百瀬の里にあり、日高川を下る筏の安全をお守りになっている。

(鎮護国家の北面観音)

道成卿の犠牲があって、七堂伽藍は完成した。名僧の誉れの高かった義淵僧正が勅を奉じて一丈二尺の千手観音像を作り、宮子姫の守護仏の一寸八分の霊像をその胎内に納め、藤原京に向かって北面させて安置した。さらに、行基菩薩が万民豊樂のためにとやはり一丈二尺の千手観音とその脇侍の各八尺の日光・月光菩薩を作って南面させて安置した。

(天音山千手院道成寺)

山号は、天皇との関わりから天音山とし、千手観音を安置することから千手院として、また道成卿の尽力によって成ったので道成寺というようになった。

この地には八幡宮が道成寺と密接にかかわっており、縁起を説く物語にはその説明もなくてはならないであろう。また、この物語の主人公が「宮子」である以上、その守護神が必要になるともいえる。あるいは「宮子」という名前は、この女性と神社とのそれ以上の深いかわりを示すものであるかもしれない。つまり、巫女的な職掌を暗示する名前であるといえよう。いずれにしろ、寺ができる以前、あるいは仏教が渡来するはるか以前から、この縁起が説く通り、里の人々の信仰する神の祠があったのであろう。それが八幡宮と名付けられるとともに、神功皇后とその子の応神天皇との母子神の伝承が結び付けられることになるが、もともと「河内王朝」の本拠地である大阪湾（かつての茅渟の海）沿岸地域には神功皇后にまつわる伝承が多く伝わっている。それは必ずしも八幡宮に限らない。たとえば、住吉大社も神功皇后の新羅遠征の物語にかかわり、堺の塩土老翁神をまつる「お寺さん」（開口神

社）も神功皇后と関連づけられ、さらには和泉市の泉井上神社も、神功皇后の新羅遠征の年に、一夜にして清水がわき出したので、この地を和泉というようになったのだとし、また新羅からの帰還に際しても、この地に立ち寄って清水を賞したと伝えられている。

さらに、不漁という里の人々の危機を救うために、渚という母が死を決して海に飛び込む姿を考えれば、柳田国男風にいえば、「かつて人の命を反故にした」人柱の風習の名残りをこの伝承には読み取ることができるかもしれない。しかし、そこで手に入れたのが観音さまであり、人柱を要するような古代的な宗教に新たな信仰がとって代わることになるのである。観音さまは、一言でいえば、現世利益の仏であり、われわれのさまざまな苦難を救い、またさまざまな願いを叶えてくれる。その際、そのさまざまな状況に応じて、観音さまは三十三の姿に変えてわれわれの前に現れることになる。いずれにしろ、海のそばの観音さまは、人々を海難事故から救ってくれることになるであろう。『法華経』『観世音菩薩普門品』には、「若し百千万億の衆生ありて、金・銀・瑠璃・砗磲・瑪瑙・珊瑚・琥珀・真珠等の宝を求めんがために大海に入らんに、仮使、黒風その船舫を吹きて、羅刹鬼の国に飄わし堕しめんに、その中に若し乃至一人ありて観世音菩薩の名を称えば、この諸の人等は皆、羅刹の難を解脱るることを得ん。この因縁を以て観世音と名づくるなり」といった個所や「或いは巨海に漂流して、竜・魚・諸の鬼の難あらんに、彼の観音の力を念ぜば、波浪も没すること能わざらん」といった個所があって、海の上で暴風に遭い、怪獣の獲物になろうというときにも、ただ観世音菩薩の名前だけを称えれば、助けてもらえるのである。人柱はもう必要ない。

この宮子の頭には髪の毛がなかった。生まれたての赤ん坊には髪の毛がないのは珍しいわけでもあるまいが、セクシュアリテは時代によって変化し、女性の身体の中の部位に男たちが魅力を感じるかも時代によって変化する。高貴な女性は屋敷の奥深く過ごし、その顔を拝することは普通にはできなかった。ただ、車の簾の下からはみ出た髪の毛の下り端に奥ゆかしさを感じて、男たちの想像力は刺激される。その女性とようやく関わりを持つことができ

たとしても、まずはその髪の手触りが描写されるのが、物語の常套手段であった。むかしの美人の第一条件といえば、長い髪の毛の美しさだったのである。村上天皇の女御の藤原芳子という女性は長く、美しい髪の毛の持ち主であったとして、『大鏡』の次のエピソードはしばしば引用される。

「御女、村上の御時の宣耀殿の女御、かたちおかしげにうつくしうおはしけり。内へまいり給とて、御車にたてまつりたまひければ、わが御身はのり給けれど、御ぐしのすそは母屋の柱のもとにぞおはしける。ひとすぢをみちのくにがみにをきたるに、いかにもすきみえずとぞ、申つたへためる」

宣耀殿の女御の身の丈にあまり、牛車に乗っても、まだ母屋の床を払っていた髪の毛が、賞賛とともに語られているのである。

つるつるの頭であったものに美しい七尺にあまる長い髪の毛が生えて、観音の慈悲がことさらに強調されることになる。いずれにしろ、観音様の慈悲でもって、宮子は長い美しい髪の毛をもつ女性に成長した。この髪の毛を雀がくわえて持ち去り、都の宮廷の軒端に巣をつくることになる。鳥のくわえてきた髪の毛から、その持ち主の女性を探し求めるというのは、もう『トリスタンとイズー』のモチーフに重なっている。ヨーロッパでは金色の美しい髪の毛の持ち主の探索に出かけたのはトリスタンであり、その髪の毛の持ち主が嫁ぐべく運命づけられた男性はマルク王であった（あるいはトリスタンであった）。わが国で髪の毛の持ち主を尋ね出しに出かけたのは粟田の真人であり、嫁ぐべき相手は帝であったことになる。藤原不比等は余分な存在であるかもしれない。あるいは両義的ともいえようか。トリスタンの位置にあるのか、あるいはマルク王の位置にあるのか、宙吊りの状態であるともいえ、またどちらの方にも足を置いているといえる。

藤原不比等の養女になった宮子は文武天皇の後宮に入る。この天皇の後宮がどのようなものであったかについて、私は『かぐや姫の光と影 物語の初めに隠されたこと』（人文書院）で論じたことがある。『竹取物語』そのものがまったくの虚構ではなく、かぐや姫に求婚する五人の貴公子（石作りの御子、車持ち御子、安部のみむらじ、大伴のみゆき、石上のまろたり）は文

武朝の実在の人物であり、とすれば、かぐや姫に求婚するみかども文武天皇と考えざるをえないことを指摘した。みかどの求愛を拒否して月世界に帰っていくかぐや姫の姿を通して、この文武天皇の後宮のありようを推測することができよう。女性たちは幸福ではなかったのである。宮子は雨ざらしの観音さまを心配して憂いに沈んだということになっているのだが、その憂いを癒すために、文武天皇が寺を造ったことになる。

この寺を造るに当たって陣頭指揮を執ったのは紀道成という人物であったが、道成は落命する。その名前を寺の名前にしたわけだが、早瀬が取り上げ、宮子の守護仏であった一寸八分の観音を胎内に納める一丈二尺の千手観音を北面させ、同じく一丈二尺の観音を南面させて安置することになったという。そして、そのそれぞれを造ったのは義淵と行基という奈良時代を代表する名僧だったことになる。これら二人の僧が関わっていたことと云い、また文武天皇勅願の寺だという以上、道成寺の創建は国家的な事業であったことになるが、正史の『続日本紀』にはそれに関わる記事がない。このことも考えておく必要があるであろう。

【『道成寺宮子姫伝記』について】

さて、もっとも手に入りやすい資料で、道成寺の成り立ち、すなわち「髪長姫」の物語について説明したが、この『道成寺絵とき本』の内容は道成寺に伝わる『道成寺宮子姫伝記』上・下二巻の絵巻物のほぼ上巻に当たる部分を下敷きにしている。これは道成寺の資料館のガラス・ケースに展示されているのを見ることができるが、その写真が私の手許にはある。道成寺の許可を得た上でその翻刻を下に行いたいと思う。

（原本はもちろん縦書きである。行変えは原本通りにして、読みやすさのために、濁点および句読点を付すことにする）

（一）

爰に人王四十二代の皇文武の帝と申奉るは、

草壁の皇子の御子、幼き御名はかるの王、諱は
天の真宗豊の尊と申奉り、大和国藤原の
宮に入らせ給ふ。此帝の御宇に、紀伊の国
日高の郡に、八幡山のにしの麓のかたほとりに
兄弟九人の海士有けり。苫屋の柴戸、明るに
賤のけぶりのたちかねて、侘しきいとなみに
汐濡衣ほす間もなく、春は色めで桜苔、
花なき秋はもみぢ、かい・鮑・さざゐを拾ひつゝ、
千尋のそこに日を送りけり。そが中に一人の
乙女あり。名を宮といふ。爰に不思議なる哉、時々
海底より霞の如くなる光り有り。人びとあやしみを
をそれけり。をと女、兄にいふ様、「我も共にうみの
底に業をいとなみけれども、光に恐れ、かの
所へ水入せず、邂逅ならず。ひかり有はいづかし。
こころみにそこを探り見ん」と談りければ、人々
とゞめけれども、深くおもひ立し事なれば、
浪静成日、人に忍びて海に入。（爰に天童現出て、告給、「この海底に光明の
赫曜たるは観音の在す也。拾ひ上て得させよ」と見し共いふ。）
玉藻・鹿角・菜藻かき分て、岩の端ざまを探り
しに、かたじけなくも、黄金をもて作りし
千手観音の御像あり。斯も尊き御仏を
滓となし奉るこそ恐しけれと、自ら髻に
つゝみ籠め、我屋にかへり、このよしを告語
ければ、みなみなよろこび尊び奉り、苫屋の
ひがしなる山路のいはのうへに草の庵を
むすびつゝ、則移し奉り、
兄弟をこたりなく
事りける。

出来事がいつの時代のことが、それが文武天皇の御代であることを最初にことわって、物語の常道を踏まえている。もう一つの縁起である真砂の庄司の女と旅の僧の物語は嵯峨天皇の御代のこととなっていた。ここでは八幡宮の縁起は語られず、神功皇后についての言及もない。ただ八幡山が存在が語られ、その西の麓のかたほとりに住んでいた海人たちの集団が語られている。「九海士」というのは、あるいは海人であるとともに、八幡宮の神人ではなかったかという推測が可能である。ここでは早鷹・渚に当たる、ヒロインの父母は登場してこない。海に潜るのは宮子その人である。そして黄金の観音像を海の底に見出し、それを髪の毛に包み込んで持ち帰り、それを岩の上の草案に安置して、他の八人の兄弟たちとともに大切にお世話した。ここでは、宮子の頭に髪の毛がなかったわけではない。髻に包み込めて海底から持って来たのだから、豊富に髪の毛はあったのである。実際、この詞書きに付随する絵には、身の丈に余る髪の毛を水に漂わせながら、海底の光の方へ向って潜ろうとする半裸の海女である宮子の姿が描かれている。観音の靈験でその髪の毛がより神々しいほどに美しいものになったとはいえるかも知れない。

（二）

ある時、みやこにて朝臣藤原の不比等参内の
をりから、南門の前に至りけるに、おふそより雀
翔来り、南門に群り、軒に巢を作りあり
ければ、雀を追ひはらひ、巢を取よせ見れば、
ことごとく一丈余りの黒髪なるゆへ、珍しき事に
おもひ、このよし帝に奏し奉りければ、世にかみ
長き人の有けるにやと、衆議まちまち成ぬ。其後、
時の有司をめし給ひ、世に髪ながき
人あるべし。尋ねきたるべきよし
勅定有ければ、叡慮のおもむきを

申下し、人を使用して四方の
国々へ発しけると南。

マルク王は結婚したくはなかった。王位をトリスタンに継がせるために。しかし、トリスタンを嫌い、彼に王位を継がせたくなどない臣下たちは、マルク王に嗣子を得させるためにたって結婚を勧める。折から燕が美しい金色の髪の毛を加えてやってくる。マルク王はこの美しい金髪を持ち主となら結婚しようというのである。その女性、イズーをすでに知っていたトリスタンはアイルランドに向かう。日本で長く美しい髪の毛（黒髪だったのであろう。だが、あるいは黄金色の観音さまに染まって金色だったのではないかと、ふと思ったりもするのだが）を見出したのは、日本では藤原不比等であった。この場面の絵を見ると、門の石段の前に不比等が立っている。その眼の前では一人の仕丁らしい男が踏み台の上に立って門の屋根の方に棒を伸ばして、鳥の巣をつついていようである。踏み台の上に立っている仕丁の下では、折敷をもってまたもう一人の仕丁が立っている。その折敷の上に鳥の巣を乗せるのだらうと思われる。トリスタンは王の甥であって、王族であったが、実は藤原不比等も皇子だという説がある。『竹取物語』で車持の王子として出てくるのは不比等に他ならないが、天皇が自分の胤を宿した寵姫を臣下の賜う、そして生まれ出た子を臣下がわが子として育てたということになる。それはともかく、不比等は美しく長い髪の毛を文武天皇に示し、それに興味を示した天皇はその髪の毛の持ち主を探させることにする。

（三）

其後、乙女は怠りなく、朝夕み仏に仕えける。
栗田の真人、勅を承り、かみながき人を尋ね
来りて、みちのほとりに乙女の髪の毛のながき
を見給ひ、是こそ尋ねむる人ならめと、人をして
尋させけるに、「妾は此郷に住賤の女也。この比、尊き

御仏をひろひ、斯も仕り侍也」と言葉優美に
唯へける。是只人にあらずと、真人、帝の
勅のよしをかたりて、「洛陽へともなひ参らん」と
告げれば、乙女いふよう、「妾は八人の兄あり。
何事もこのかみのこゝろに任すべし」と
唯へければ、夫より乙女に随ひ、苫屋に
いたりける。

トリスタンとイズーの出会いは二度目だが、粟田の真人は初めて宮子に出会う。絵では従者をしたがえ、乗馬姿の粟田の真人が描かれている。道のほとりで確かに宮子と出会う。宮子はまことに長い髪の毛を垂らしながら、岩の間に安置された観音さまにお祈りしているところである。受け答えもはなはだ優美で、真人もこれはただ人ではないと直感するほどの器量なのである。文武天皇の勅を伝えると、宮子はそれには直答せず、兄弟たちが答えるであろうと返事をする。アマテラスの孫のニギヒは高天原からこの国に下ってきて最初にしたことは、そこで出会った美しいコノハナノサクヤヒメに求婚することであった。そのとき、サクヤヒメは自分は答えることができない、父親のオオヤマツミが答えるであろうと返事する。求婚への返事は自分をするものではなく、親族の男がすることになっていたのであろう。「婚主」という言葉がある。婚姻の主催者という意味であるが、それは婚姻する本人ではない。ここで浮き彫りになるのは、ここでの宮子は父も母もいない境遇なのだということである。イズーには父母がいた。アイルランドの王と王妃である。

（四）

ほどなく賤の苫屋に至り、あらこもの褥を
もふけゝれば、其まゝ席に着給ひ、
海士の兄弟を呼集め、粟田の真人
せんじのおもむきを申聞

ければ、「よきにはからひ
給はれ」といらへければ、
夫より洛陽へ
ともなひ
かへりける。

天皇からの使者の言葉に、兄弟たちが抗おうはずもなく、自分たちの妹が都に上ることを承諾する。これに付随する絵では、壁土の落ちた藁ぶきの家の中にどっかと腰をおろしているのが粟田の真人とその付添いのも者であり、その前の地面に髪の高い宮子を囲むようにして海人である兄弟たちがひれ伏している。腰蓑をまとっている者もいて、漁の道具である魚籠が転がっている。日々の生業を中止して、あわてて家に帰ってきたというところであろうか。兄弟たちは天皇の使者を家に迎え入れ、自分たちは地面にひれ伏す。身分制社会ではこうあらねばならなかったろうが、あらためて、宮子の出自の低さを意識させられる。身の上を明かさぬまま付き合いを深めた光が夕顔に出自を問うたとき、夕顔が答えたように、彼女はあくまでも「海人の子」なのである。夕顔ははぐらかしただけであったが。

(五)

粟田の真人、海士の乙女をとみなひ、皇都にかへりて、帝へ奏し奉りける。勅有て、藤原の不比等のやしなひ子となし、宮子媛と号し、終に后妃になしけるとぞ。

(或云、粟田の真人は文武帝大宝元年正月遣唐使を承り、漢土に渡り、同じく慶雲元年の七月に帰朝す。又藤原の不比等は元明帝の養老四年に薨ず。淡海公と諡すといふ)

愛の媚薬などここにはなく、粟田の真人と宮子の間には何事も起こらない。ワグナーのオペラのように自分たちを突き動かす情念に身もだえしてのたまわまるようなこともなく、二人は都にもどる。そして、勅命によって、藤原不比等の養女となり、そこから文武天皇の後宮に入ったと、ここでは語られている。絵は宮子が入内するありさまを描いているのであろうか。引き出物らしい多くの物を捧げ持つ侍女たちを後に随えて、宮子が宮廷の廊下を歩いている。注釈にある通り、粟田の真人は文武朝の重要な人物である。ここにあるように、大宝元年（701）に遣唐執節使に任じられ遣唐使として唐に派遣される直前、大宝律令が完成したときに、その褒美として禄を賜ったのは十七人であったが、刑部親王、藤原不比等の次に第三番目の人物として名前が挙げられている。慶雲元年（704）に日本に帰ってきたときの『続日本紀』の記事は次のようである。

秋七月甲申の朔、正四位下粟田朝臣真人、唐国より至る。初め唐に至りし時、人有り、来りて問ひて曰はく、「何処の使人ぞ」といふ。答へて曰はく、「日本国の使なり」といふ。我が使、反りて問ひて曰はく、「此は是れ何の州の界ぞ」といふ。答へて曰はく、「是は大周楚州塩城県の界なり」といふ。更に問はく、「先には是れ大唐、今は大周と称く。国号、何に縁りてか改め称くる」ととふ。答へて曰はく、「永淳二年、天皇太帝崩じたまひき。皇太后位に登り、称を聖神皇帝と号ひ、国を大周と号けり」といふ。問答略了りて、唐の人我が使に謂ひて曰はく、「亟聞かく、「海の東に大倭国有り。これを君子国と謂ふ。人民豊樂にして、礼義敦く行はる」ときく。今使人を見るに、儀容大だ淨し。豈信ならずや」といふ。語畢りて去りき。

粟田の真人が立派な人物であったことは、事実その通りであったのだろう。しかし、唐の人が粟田の真人の儀容を見て、日本が君子の国だと評価したというような個所はそう重要視すまい。それよりも興味深く思うのは、則天武后が睿宗を拝してみずからが即位して、国号を周と改めたのが690年で、それ

から705年まで在位したわけだが、その情報を公式にわが国にもたらしたのは、粟田の真人であったらしいということである。この時代の文物をいち早くもたらしたのも、粟田の真人の率いる遣唐使一行であったろう。この藤原京から奈良時代の初めの宮廷人は養老三年（719）の二月に、「甲子、正三位粟田朝臣真人薨しぬ」とあって、不比等より一年早く死んでいることになる。

（六）

蜃の身のきのふと成て、雲のうへ、今は
花闕の奥ふかくいませども、絶ず忘れぬは
庵に残せし御仏のあめのやどりをもふけ度、
不比等にひたすらたのみけるに、いなみがたく、
此よし奏し奉れば、帝叡慮ましまして、
一字建立いたすべきよし、紀の道成卿を
召して勅せられける。

ここで上巻は終わる。絵では、不比等が立って、その前に拝礼している紀道成に帝の詔勅を渡そうとしている。その奥の方では朝臣が並び、簾があって、その奥に帝がいるらしい。紀道成の名前がここで初めて出てくる。また、この紀道成なる人物は正史には名前をとどめない人物である。あるいは、正史の中で紀氏のこの時代の有力者を探すとすれば、紀麻呂なる人物がいて、麻呂＝道成とする説もある。紀麻呂は大納言まで上がって、慶雲二年（705）に死んでいる。いずれにしろ、紀伊国に地盤をもった古代からの豪族の有力者が地元の大寺の創建に尽力したことになる。

『宮子姫旧記』の下巻は、道成寺の建設に絡んで、この地方の地誌的な様相を帯びる。寺の建設には上流で木材を切り出して、急流を筏を組んで流して下す。深い山々と急流の様子が絵にも美しく描かれている。また特別に「瀑布船の図」などもあるのだが、この瀑布で道成は命を落とすことになる。

道成卿山にいりて、材をきらしめ、筏に
綴りて、川にながし、自らも乗りて、是を
左右し下りけり。高津尾村九留世の流に
ちかづきける。扨この瀬に乘かゝりて、
あさましや、いかだの端いはほにはたとあたり
ければ、さかまく水の勢ひにたたみかけて、
ことごとく切れ、兎や角とするうち、道成卿
はげしき渦に沈けり。楫師も溺死する
もの多かりしとなむ。

尖った岩を下る滝を木々が飛散して落下している様子が描かれ、多くの半裸の楫師の中に一人だけ真っ逆さまに落ちて行く衣冠の貴人の姿が描かれている。それが紀道成ということになるう。

そして、道成の死体が流れ着いたところに紀道明神を造ったというのだが、道成が命を賭してまでその建造に尽力した伽藍はやがて完成する。

ほどなく伽藍も落成しければ、勅有て、仏
師をめしよせ、一丈二尺の千手観音を彫
刻させ、其軀に海底より拾ひ上し一寸八分の
閻浮檀金の観音をこめ、堂の裏に納め奉る。
衆僧を集め、供養をいとなみ、道
成うけ給りて草創なしける由縁にて、天音山
道成寺と号しけり。其後、帝の勅して、
海士の兄弟をめし給へども、堅く辞して、此寺の
傍に住みて、観音を信じ奉ると南。往昔、この所は
入江にて西の山より三丁程の間に長き橋をかけ、
往来せしといふ。実や、桑田変じて蒼海と成理り
にて、今は陸地と成ぬ。又、八幡山南の麓成道に、

神さびて小サキ社有。宮子媛を祀り、海土明神と
崇めけり。髪は短くすくなき人は、苧を黒く染て、
此神に供えて祈けると南。是より一丁程西に九海土と
いふ所有。宮子媛の産郷也。今は巫女の住けると也。

【『紀道大明神縁起』について】

『道成寺宮子姫伝記』が伝えるように、紀道成は勅命を奉じて寺の建設に
当たり、材木を調達する過程で命を落とすことになった。その遺体が流れ着
いた三百瀬に紀道成を祭神とする紀道神社が建てられ、これは今も存在して
いる。この神社の由緒を語る『紀道大明神縁起』は力点を、当然のこと、紀
道成に置くことになるが、やはり髪長姫の伝承を語っている。

(一)

紀伊国日高郡三百瀬の神社は、
人皇四十二代
文武天皇の御宇、藤原道成卿
神靈跡を垂給地也。卿は大織冠
三世の孫也。当初道成卿、勅を
奉て、同郡矢田荘に寺を営給。濫觴
相伝曰、昔寺の西吉田邑、其間百歩
余り、水ながれ潮通ひ、長橋有て
人往来す。今皆田苑となる。吉田の
辺に蟹戸あり。潜のいとまなく、
日毎に海の深に入。一時水底光
有て、海を照す。蟹人は是をおそる。時に
ひとりの蟹、光を認て推尋、観音薩埵の
尊像を見奉り、感じ得て家に還り、
蟹家の不浄なるを厭ひ、里の隣に
樹陰の便を求め、茅をむすびて

尊像を安置し、数の歩を運ぬ

（一説、閻浮檀金一寸八分金像の

観世音、蜃の髻にとりつき、

海底よりあがらせ給ふ）

ここでは紀道成が藤原道成となって、大織冠すなわち藤原鎌足の三世の孫ということになっている。「三世」は今風に数えずに、ただ孫だと考えてよいだろう。藤原不比等の子どもであり、武智麻呂・房前・宇合・麻呂の四兄弟が有名だが、もちろん、道成の名前など藤原氏の系図には見えない。藤原氏であれば、なぜ「紀道神社」なのか、説明がつきにくいと思われるのだが、藤原による権威づけを欲したのであろうか。この道成を祀ったのが三百瀬の神社であり、その道成が建設にかかわって落命するにいたった寺の由縁がここでは説かれている。それにはやはり蜃（海人）がかかわってくる。当時は海岸線が今の内陸部の方にまで迫っていたのであろう。吉田の里に蜃たちが住んでいたが、海底に光があって、一人の蜃が海に潜って観音像を持ち帰り、それを茅屋に安置したことが説かれる。

絵には、この物語の情景が時間の経過をただ一枚に収めている。右手がや橋がかかっている寺の造られたのは矢田荘ということになろうか。画面の右側に木々の茂った丘があり、川が流れている。その詞書どおり、橋がかかっていて、手前の海では海人が抜き手を切って泳いでいる。その頭部には金色の観音像を載せている。「髻にとりつき」というありさまを描いているのであろう。浜辺には茅屋が三軒あるが、さらに奥には一軒あって、こちらは海人が持ち帰った観音を安置した茅屋なのであろう。

（二）

蜃にひとりの女子あり。容貌すぐれ、

襦袢の中より髪不生。母常に是を

憂とす。或夜の夢に、彼観世音枕の

ほとりに立給ひ、「我は是衆生済度の
為にこゝに來れり。汝宿世の善縁有、
所願を適給ん」となり。母夢中に
わが子の髪生、ゆくえ長からんことを
ねがふ。さめて後、髪をのづからはえ、
漸く長に余り、淑姿世に類ひなし。
此利生を被り、母子ひとへに彼観音を
念じ奉る。髪を薩埵のたまものとし、
梳り落れば、母其髪をとり、木の
枝にかけ、人をして踏しめず。
伝曰、荒海氏重勝といふ者流落し、
此所に来り、蜃乙女を妻とし、此子を
まうけゝるとなり。

この海底から観音像を持ち來った海人には女子が一人いて、髪の毛が生えていなかった。この観音に、子どもに髪の毛が生えるように願ったところ、髪の毛は生え、また美しい女性に成長した。ここではすでに生まれていた子どもについて祈るわけだが、老夫婦がたとえば京都の清水寺の観音さまに子どもを授かるようにお祈りするというのは、よくある御伽草子のパターンであり、また実際にその祈願の目的で、庶民たちは観音の靈場にしばしば参詣したのであつたろう。「觀世音菩薩普門品」に、「若し女人ありて、設し男を求めんと欲して、觀世音菩薩を礼拝し供養せば、便ち福德・智恵の男を生まん。設し女を求めんと欲せば、便ち端正有相の女の、宿、徳本を殖えしをもて衆生に愛嬌せらるるを生まん」とある。ここではもともといた赤ん坊が「端正有相」の女性に育ち、髪の毛も長く伸びて、その「淑姿」は世に類ないほどになったのである。その髪の毛は観音さまからの大切な授かりものであつたから、抜け落ちてても大切に、人に踏ませないようにしたというのだが、女子の髪の毛は元來そのように大切にされたものであつたと思われる。フレ

イザーの『金枝篇』を持ち出すまでもなく、共感的な（sympathetic）な思考様式においては、髪の毛はその当人と変わらないものとなる。髪の毛を所有することは、その当人を所有し、支配することをも意味することになる。その髪の毛を使って、さまざまな呪術も行いうことが出来るであろう。まさしくfetishなのである。見も知らない人間に踏まれるようなことがあってはならないのである。

実は柳田国男はその『妹の力』で、女の髪の毛をめぐってさらに鋭い含みのある指摘をしている。柳田の「髪長姫」のかかわる説は後に詳しく考えることにするが、

「縁側に出て髪を梳くと、散った毛が風に飛んで鳥の巣に作り込まれる。さうすると其女は気がちがふなど、物狂ひになることを結果とした色々の戒めがあるのも、神の御告を伝える者の必ず物狂ひであつたことを考へると、是も最初は亦巫道に入る方式の一つで、求めてさうした者が曾ては有つたことを、暗示する所の大切な資料なのかも知れない」(『定本柳田国男全集』第十一巻)

というのである。

子どもの父親は荒海氏重勝という流落の者であったことがここには付け加わっている。荒海氏の系譜はよくわからないが、その詮索をする必要はないであろう。このたった三行の記事が面白いのは、海人の社会構造がどうやら女系で成り立っていたらしいことを端的に物語ってくれることである。男は流浪者であってよく、生計は女性によって立てられ、社会も女性によって構成され、女系によって継承されていく。

絵では、中央に一軒の茅屋があり、そこで女が横たわっている。その枕上に観音菩薩が立っている。家の外、右手では幼くて頭に髪の毛の生えていない子が座り込んでいる。ところが、左手には、身の丈ほどの髪の毛を垂らした女の子が立っている。観音の靈驗あらたかで、母が目を覚ますと、髪の毛が生えて、美しい少女になっていた、それを一場面に描いているのである。

それとは別の場面の絵が続き、腰蓑をつけた母親が、抜け落ちた少女の髪

の毛を、観音からの授かりものだとすることで、大切に木に懸けている。

(三)

野鳥此髪を含み、自然に禁裏に
伝へ、御園の桜に巣くふ。髪垂て、
偶 叡覧に入。 帝巢をおろし
見せしめ給ふに、此髪あり。頓て
王畿の内外に命じて、このながき
髪の人を求め給。遂、紀伊国日高
吉田の辺に到り、蜚の子の髪を見て
かへり奏す。
帝此蜚の子をめて、いつくしみ有。
妾、心さへやさしく、後は后妃の数に
入けるとなり。
相伝曰、此時の勅使、称号大広橋。
(一説、蜚の子観世音の利生に
より、一夜醜容変して美婦と
なる。此事達叡聞、禁裏に
めし給ふ。勅使道成卿)

この髪の手を喰えて都に飛んでいった鳥が巣を作るのは、『宮子姫伝記』のように宮廷の門ではなく、宮廷の庭園の桜の木である。そして、それを見にするのも、藤原不比等ではなく、帝その人である。そして、帝が直に諸国に命じてこの髪の手を持ち主を探すように命じる。紀伊国日高郡の吉田でこの髪の手を持ち主を探し当てて、都に召し、そして后妃の中に数えられることになる。『宮子姫伝記』で栗田の真人がつとめた勅使の役割を、ここでは「大広橋」なる人物がつとめたとし、一説として「道成卿」だとする。

絵ではまず、宮廷で、桜の木があり、鳥が描かれ、巣があって、そこから

長い髪の毛が垂れ下がっている。その左には帝の御座所が描かれていて、簾が半ば垂れた、その後方に帝が座っていて、顔を見ることはできない。その前に平伏しているのは、髪の毛の持ち主を探すべしという帝の勅を受けて探し回った結果、紀伊国日高郡のその持ち主が見つかったと奏上している臣下であることになろう。

続く絵では、勅使「大広橋」が馬に乗り、従者をしたがえて、紀伊国日高郡に向かう場面が描かれる。その行く手には、みずからの抜けた髪の毛をいつもの木に懸けようとしてやって来たと思われる髪の毛の長い少女が描かれている。

さらにまた続く絵は、今度は少女をともない、帰京する場面なのであろう。右手（後方）には馬に乗った人物とそれを囲んで歩く従者たちの一群が描かれ、左手（前方）には少女が乗っているらしい籠をかついで歩く人々の一群が描かれている。前方のグループと後方のグループとがかなり離れて描かれているのが、少し気にならなくもない。

（四）

妾、雨にむかふごとにおもひの色有。

「いかにかくあるぞ」との 勅問なり。

妾、事のあるかたを以てまうし、且は
尊像雨露の便なきことをなげく。

帝、叡感有。これが為に寺を創給。

道成卿 勅を奉て、興行有。大宝年中

伽藍成就し、此卿の諱に因て

道成寺と号し、永代の勅願寺と

なり、海底の尊像をして新造の

仏胎に蔵しめ給。今寺の本尊、

丈余の千手これなり。土人、妾を

蛭王子と称し、吉田の辺に叢社在。

醍醐帝の御代、延長年中、真名子
庄司の娘変じて蛇体となりて
此寺に入しより、由来猶世に伝へ、
貴賤の男女こゝにつどふ。皆これ
観世音済度の方便なるべし。

海人の子から帝の寵姫となり、宮廷での生活を享受する。世にも喜ばしきシンデレラ・ストーリーであり、なんらその仕合せに陰りは無いはずであった。ところが雨の日には憂愁が襲う。帝がその理由を問うたところ、故郷の雨ざらしの小屋の観音さまが気に懸かるという。そこで、帝は紀道成に命じて寺を造らせた。大宝年中には完成して、海底から持ってきた観音像を新たに作った丈余の千手観音の中に納めたことまで書かれ、妾というのは母親のことであろうが、その母のために叢社をも造ったと書かれる。さらには、例の僧を追いかけて蛇体にまで変じた女の妄念の話も、ここでは付け加えられている。

絵では帝の前で、女が袖を顔に当てて泣いている。故郷の観音さまを案じているのである。縁側には臣下が一人座って侍しているが、これが道成ということになろうか。横殴りの雨が降っていて、庭の木も激しい風にになっている。

その次には、完成した寺院の伽藍が描かれている。石段を上って左右に仁王像のある山門を潜ると、例の鍾楼があり、三重塔があり、本堂がある。堂々たる勅願の寺の様子である。

(五)

道成卿、寺の東三百瀬の里に
薨御有。因て此地にかくしまつる。
帝 神号を道成卿に賜る。当社
紀道大明神、是也。蓋、此卿君子の

徳盛にして、道を修め、皇家を補佐し、
民を専一給けるものか。人わづかにも
道の心を以て神の佑を祈り奉れば、
感応影響よりも捷なり。願望
成就せずといふことなし。神徳
日々に章れ、如在の礼莫懈らず。
凡仏徳・帝徳・臣の徳、冥合して、彼寺
さかりさかえ、吾朝の霊場となると
いへども、特には道成卿の遺徳、当社の
神功ならんかし。かれは此地に鎮座在、
国家擁護の神と現し、万世跡を
垂給ふ。

正史には現れない紀道成の遺徳をしのぶ頌である。やはり紀道成は紀麻呂なのであろうか。「麻呂」というのは半ば普通名詞であって、固有名詞ともいえない。大勢の麻呂を差異化するために、さらに別の命名はなされることになって不思議ではない。紀麻呂は「道成」と称していいほどの人格者だったのではないか。「蓋、此卿君子の徳盛にして、道を修め、皇家を補佐し、民を専一（にし）給けるものか」とある。ただし、『続日本紀』慶雲二年（705）のところに、「秋七月丙申、大納言正三位紀朝臣麻呂薨しぬ。近江朝の御史大夫正三位大人が子なり」とあって、道成寺が完成したという大宝年中というのは701年から704年であることになるから、厳密に論を展開するなら、材木流しのために死んだ道成＝麻呂の薨はそれ以前でなくてはならない。しかし、極めて近接した時代のことであって、道成＝麻呂という説は蓋然性が高い。

こちらの『紀道明神縁起』の方は、『宮子姫伝記』にくらべると、紀道成の死のありさまをあからさまに記しているわけではない。

絵は蛇行する日高川を背にして、断崖の上に建てられた神社が描かれている。

この『紀道明神縁起』の末尾には次のような文章が添えられている。

「中比野火の殃にかゝり神宝古記等
今なし偶土人のことをとめて斯に
記し将来に伝畢」

この絵巻の成立年代がよくわからないが、江戸時代のこの土地の人々が伝えていた内容を記したものであることになる。

【『竹取物語』について】

さて、紀伊国の日高郡の道成寺および紀道明神の由縁を語る二つの絵巻物の紹介を終えた。この稿では、現在、存在する道成寺および紀道明神の歴史的な背景を探ることに重点を置いてはいない。そして、ここで説かれる藤原不比等と宮子との養父・養女関係の信憑性を検証しようという目的で、この稿を起しているわけでもない。他にも髪の高い女性をモチーフにした物語が『古事記』・『日本書紀』には存在しているし、鳥のくわえてきた美しい髪の毛の持ち主を探し出してきて王の配偶者にしようというのは『トリスタンとイゾー』のモチーフでもあった。髪の毛の持ち主ではなく、ひらひらと飛んできた絵に描かれた美しい女性を探し出す「絵姿女房」の説話は日本各地に存在していて、それは「髪長姫」の物語の一つの変異型であると考えられる。さらにはまた、「海人の子」の物語であり、髪が話題になるとすれば、『源氏物語』の夕顔と玉鬘の母娘の物語にもつながっていくのではあるまいか。それらを「トリスタンとイゾー」のサイクル（伝承群）として捉えなおそうというのが、この稿の目的である。

しかし、梅原猛氏が問題提起されたように、藤原不比等の娘として文武天皇の後宮に入った宮子が藤原氏の女子ではなく、紀伊国の海人の娘であったとする伝承をそのまま歴史的事実であると考えれば、八世紀初頭の日本という律令国家の形成の内実の再考を促す契機となるであろう。この文武天皇の後宮について一言して置きたい。

私は実はかつて『かぐや姫の光と影』（人文書院 1991年）という書物を著したことがある。それは、これまで単なるメルヘンであるとか（和辻哲郎）あるいは平安時代時代初期の世の中を描いた世態小説であるとか（津田左右吉）といった評価しかなかった『竹取物語』について、五人の貴公子の求愛を拒絶し、さらには帝の手をも振り切って月世界に帰っていくかぐや姫の造形には、実は都が藤原京にあった文武天皇の時代の後宮に生きた女性たちの悲劇が下敷きになっていることを指摘したものである。髪長姫＝宮子が文武天皇にかかわったように、かぐや姫も文武天皇にかかわっている。

美しく成長したかぐや姫に、世界の男たちは心を奪われるが、中でも五人の貴公子たちがたつてかぐや姫に求婚する。かぐや姫はこの五人に結婚の承諾の条件として、それぞれに難題をふっかけるが、この五人は歴史上実在の人物である。

（物語の中の名前）

石つくりの御子	丹比真人島
くらもちの御子	藤原朝臣不比等
右大臣あべのみむらじ	阿部朝臣御主人
大納言大伴のみゆき	大伴宿祢御行
中納言石上のまろたり	石上朝臣麻呂

それぞれの細かい考証は省略することにしたいが、『日本書記』の持統天皇十年冬十月の条に、

「庚寅に、仮に、正広参位右大臣丹比真人に、資人百二十人賜ふ。正広肆大納言阿部朝臣御主人・大伴宿祢御行には、並に八十人。直広壺石上朝臣麻呂・直広貳藤原朝臣不比等には、並に五十人」

とある、この時代の寵臣たちを物語に登場させていることになる。

しかし、かぐや姫に求婚したのはこれら五人だけではなかった。実はもう一人の求婚者がいた。そう、帝である。この時代、持統天皇が女性であり、

また元明・元正両天皇も女性であるから、かぐや姫に求婚する帝というのは文武天皇以外にはありえないことになる。かぐや姫に求婚した五人の貴公子はみなかぐや姫の出した難題をかなえるべく努力して、失敗するが、そこでは律令制の確立時代でもあるこの時代の宮廷社会を徹底的に批判し、風刺しているのである。そして、『竹取物語』の大団円は、月世界にもどるかぐや姫がこの世に遺していった「不死の薬」を、かぐや姫を失った絶望から、みかどは日本で一番高い山で焼かせたという「富士山」の語源説話になっている。それは二十五歳で死んだ文武天皇の夭折という歴史的事実の物語による原因説明なのではないか。

また、富士山周辺にはおびただしい数の浅間神社が存在する。この神社の祭神は木花佐久夜（コノハナノサクヤ）姫であるが、この女神も天皇の死と深くかかわる女神である。

アマテラスの孫であるニニギが、豊葦原中洲国を支配していたオオクニヌシー族の国譲りを受けて、高天原から天下ったとき、最初に出会ったのがコノハナノサクヤ姫であった。さっそくニニギはサクヤ姫に求婚する。サクヤ姫の父親の大山祇（オオヤマツミ）神は姉の石長姫を添えてニニギに贈った。しかし、ニニギは美しいサクヤ姫とだけ契って、イハナガ姫はかえしてしまった。そのことで憤ったオオヤマツミは、イハナガ姫を返してコノハナノサクヤ姫とだけ契った天孫の寿命は、木の花のようにはかなく短いものとなるであろうと呪詛したというのである。

オオヤマツミの呪詛によって、歴代の天皇の短命を決定されたという恐るべき神話が『古事記』には語られているのだが、『古事記』が編纂されたのは712年のことであり、文武天皇の死（707）はごく最近の事件だったのである。もともと神話上の祖母アマテラスと孫ニニギの関係は、歴史上の持統と文武の祖母と孫の関係の反映であったと見られる。

アマテラス

オシホミミ

ニニギ

持統

草壁皇子

文武

息子のオシホミミを天下らせればいいのに、わざわざ孫のニニギを天下らせる、はなはだ無理のある「天孫降臨」という神話は、実際に子の草壁皇子が早死にをしてしまったために、他にも多くの皇位継承者がいる中で、どうしてもみずから血を引く孫の軽皇子（文武天皇）に天皇位を継承させたいという祖母・持統天皇の強烈な意志を語ったものであり、それまでして位についた文武も夭折せざるをえなかったという事実がコノハナノサクヤ姫との神話では示唆されていることになる。

『竹取物語』でも富士山の語源説話で文武天皇の死が暗示され、『古事記』のニニギの神話でも文武天皇の死が暗示されている。そしてそれぞれの死にかぐや姫およびサクヤ姫という女性の関与があることになる。文武天皇の後宮のありようがここでは問題にならざるを得ないが、髪長姫＝宮子もまたまさしくこの文武天皇の後宮に生きた女性なのである。

（この稿続く）

（この論考は桃山学院大学総合研究所共同研究プロジェクト「日本文化の新しい地平」による成果である。）

The cycle of “Tristan and Iseult” in Japan (I)

Hideyuki UMEYAMA

Dojoji is the famous temple for the wicked love story of Anchin and Kiyohime. But there is also an another legend of Kaminaga-hime (Princess Long Hair) which tells of the origin of the temple.

There once was a fisherman's daughter who had beautiful long hair by grace of Kannon figure to which she always prayed. One day a bird brought some of her hairs to the imperial palace. Discovering the hairs, the emperor ordered his servants to find the owner of the hairs in order to marry her. Brought to the palace and made a favorite of the emperor, the fisherman's daughter although was sad because she had abandoned the Kannon figure. Dojoji was built by the emperor who sympathized with her anxiety for the Kannon figure.

On the discovery of the golden hairs brought by a bird, King Mark had Iseult brought from Ireland by Tristan to his palace.

The story of Kaminaga-hime is a Japanese variation of “Tristan and Iseult”. Kaminaga-hime is not an isolated case; it seems that we can find many similar stories in Japan. Here we point out, probably for the first time, the cycle of “Tristan and Iseult” in Japan.